

研修報告書

東北大学経済学部 3 年 横山真央

今回研修報告書を書くにあたって、次回のインターンシップに応募したいと思っている人達の視点から、以下 3 点について述べたいと思います。

<インターンシップに応募した動機>

私は高校生の頃から、途上国開発の仕事に関わりたいと思っていました。この業界では経験が最も重視されているが、その経験を積める場が地方の学部生には決して多くはなく、以前から NPO でのインターンシップの機会を探していたところ、SVA の募集を見つけました。貧困解決の糸口の一つとして、教育の貢献は大きいと日頃から感じていたため、SVA の事業内容を見て共感を持ち、応募を決めました。

私は以前インドの NGO でボランティアをしたことがありますが、その際はどちらかというと日本から来たお客様扱いで、NGO が実際にどのように事業を立ち上げ、活動を継続し、改善しているか、といった流れを見ることはできなかったため、今回の SVA のインターンシップで、NPO の事業の流れを実際に見、経験したいと思ったのが動機です。NPO は実際に自分の職業の選択肢の一つとして考えていたので、自分が本当に NPO で仕事することに生きがいを感じられるかどうか、実際にどのような業務を行うのか、ということを確認するためにも、このインターンシップが貴重な機会になると感じていました。

<カンボジアでの活動内容、感じたこと>

活動内容は場所で分けると二つあります。一つはオフィスワーク、もう一つはフィールドワークです。

1. オフィスワーク

オフィスワークでは、主に図書館事業課の仕事である、本を題名別に分類し、ラベルを貼り、リストを作り、書庫を整理した他、報告書の翻訳、教材作り、日本のゲームの紹介、ブログの記事作成をしました。書庫整理、本の分類は根気と几帳面さ、重い物にも屈しない力が求められる仕事でしたが、この仕事を通し、どのような絵本が日本から送られてきているか、またカンボジアと日本の絵本の比率はどのくらいか、本をどのように管理し、各学校に分配しているかなど、SVA の事業の細かな部分に目を向けることができました。実際にこの仕事を通じたおかげで、絵本が図書館に並べられているのを見たときの感動はひとしおでした。また現地の人達と協力して図書館を作り上げていく際に、その工程の大変さを感じることができたため、ただ完成後の姿を見ただけでは考えも及ばないところまで、現地の人々の図書館に懸ける思いを感じることができました。報告書の翻訳を通しては、SVA が事業の評価をどのように行っているか、またそれをどのように報告書として形にしているか、また報告書に表れないままに抜け落ちている

情報も多々あるのではと思います、データや報告書を読んだだけでは感じることはできない現場の状況をどのようにドナーに伝えるか、という課題があると考えました。また SVA の今後の課題、組織運営について、現場の状況の好転についてなどの知識も得ることができました。教材作りは私が最も苦手な仕事であり、裁縫など手先の器用さが求められました。日本のゲームの紹介は、子供達が教室で行えるゲームを思いつく限り紹介しました。このことによって子供が学校に新たな楽しみを見出してくれることを望んでいます。ブログの記事作成では、主にフィールドワークについての報告をし、このことで自分の考え、感じたことを整理する良い機会になりました。ただアップ自体は自分でしていないので、ブログに関する知識がなくても心配いりません。

また PCM という事業を作り上げる際に使う手法を学ぶワークショップにも参加し、実際に SVA がどのように問題を分析し、解決策としての事業を立ち上げるためにどのようなアプローチをしているのかが学べました。PCM という手法自体も完璧なものではなく、見落としがちな点があること、PDM という事業計画表を立てたのちにそれまでの話し合いの過程が軽視されてしまいがちなこと、といった弱点も見出せ、それを実際に気づき、改善していくことの難しさが見て取れました。またそれぞれ違った見地を持った人同士で妥協、同意を重ねていく過程は、効率性を重視する風潮に慣れた人にとって忍耐と根気を必要とする作業であり、それを乗り越えるためには、「問題を解決するために良い解決法を考え出すこと」といったもともとの目標を常に念頭に置いておくことが、議論を深めていく上で重要であると感じました。

以上がオフィスワークです。

2. フィールドワーク

フィールドワークには、プノンペンのスラムでの移動図書館、シェムリアップに出張しての図書館事業課の活動とドリームスクール建設事業課の活動があります。

プノンペンでのスラム訪問では、カンボジア人スタッフのステラさんとサムーンさんに同行し、スラムでの移動図書館事業を体験しました。実際に読み聞かせや紙芝居を行うのはステラさんとサムーンさんであり、我々インターン生は日よけ用のテント設営、移動図書館、本の管理、子供達の誘導などを手伝いました。実際にステラさんとサムーンさんが読み聞かせをしているときの子供達の様子、またその子たちの母親まで絵本を一所懸命読んでいる様子に、SVA の事業が与えている機会が現地の人々にとって大切なものであること、また実際に現地にて事業を行うスタッフはカンボジア人スタッフであるため、日本人スタッフの仕事としてはそのスタッフの育成方法を考え、事業をより持続的かつ質の高いものにしていく方法をカンボジア人スタッフとともに模索していくことにあるのではと思えました。事業の主役はあくまでもカンボジア人自身であり、日本人は徹底的に裏方に回り、サポートしていくのが事業運営の形であるように思えます。そのため両者の連携が重要であると感じました。また、一口にスラムといっても、

その暮らしぶりは様々なため、その違いを生んでいる要因は一体何か、ということをもう少し詳しく調べてみるとよかったと思います。

シェムリアップでは、図書館事業課のロアトさん、シーフーさんに同行し、新しく建設されたばかりの図書館に行きました。図書館では本も届いておらず、本棚を設置するところから始め、ロアトさん主導の下、折り紙で図書館をきれいに飾りつけたり、子供達と協力して絵を描いたり、数字や文字のポスターを壁に貼り付けたりして図書館の体裁を整えていく手伝いをしました。途中からは本が届いたため、その一冊一冊に寄贈スタンプを押したり、本を分類別に本棚に並べたりし、少しずつ図書館の体裁を整えていきました。そこでは地元の教師達、子供達も図書館の開館準備を手伝い、地域全体が図書館の完成を待ち望んでいる姿が見受けられました。図書館の体裁が整った後は、図書館員として教員に図書館運営方法を会得してもらうためのワークショップに参加し、ここでSVAが人材育成を重視し、事業の持続性に気を配っている様子が見て取れました。我々インターン生からは日本のゲーム、フルーツバスケットを紹介し、好評を得ることができました。最後に教師の皆さんの前で自分の自己紹介をする場が与えられ、そこで私の話に共感してくださった教師の中の一人の方が、後日メッセージ付きのプレゼントを下されたのが、とても嬉しく、忘れられない経験となっています。

ドリームスクール建設事業では、ニーさん主導の下、新校舎が完成した学校に赴き、建物の様子をチェックし、学校の状況について校長先生、教育省の人へのインタビューの場に同席しました。インタビューではニーさんが作成した用紙に基づき、必要な情報を集めていきます。退学者、留年者の数や、学校で抱えている問題はないかなど、じっくり時間をかけて情報を集めている様子が伺えました。工事着工が同じ日だったにもかかわらず、1校は完成し、2校目はまだ工事中といった違いがあるのはなぜか、といったこともニーさんが工事会社の職員に質問していました。こういった少しの注意を促すことが、工事が健全に行われるために必要な手順であると感じます。学校訪問ののちはその学校に通う生徒の家庭訪問を行い、子供に好きな教科は何か、などと質問していきました。家庭によっても暮らしぶりが違うところから、農村の中においても所得格差が存在していること、子供達が一様に将来の夢を語る際に家計状況を口にすることが印象的でした。家庭訪問を通して、子供の退学率を減らし、両親の教育に対する興味関心を促すことにつながっていると感じました。ただ子供たちから集めた情報が、どのように活用されていくかについては聞きそびれたため、疑問が残っています。

以上がフィールドワークについてです。

文化伝統事業については、1か月という限られた時間の関係から体験することができませんでした。文化伝統事業に興味がある人は、他の方の報告書を参照して下さい。

<終わった後で学んだこと、考えたこと>

以上を見ると、カンボジア事務所での活動こそ全てのように一見思いがちですが、東

東京事務所での活動も実際とても重要であるということがわかりました。東京事務所のスタッフの方とお話する機会があった際に、東京事務所での仕事内容についてお話を伺いました。東京事務所では主にカンボジア事務所からの情報を日本のドナーや会員の方に伝えること、また複数のドナーの援助によって校舎が建てられた際などに、ドナーの名前を刻む順番等をドナー側と話し合うこと、ドナーの新規開拓や JICA との連携など、途上国開発分野に興味のある人からすると一見地味なように見えますが、カンボジア事務所が受益者からの感謝を受けるのに対し、東京事務所はドナー側からの感謝を受けられるのが魅力の一つだと話されていました。なぜ感謝されるはずのドナーが、逆に SVA に感謝するのかというと、ドナーが現地の子供達が喜んでいたり、立派な校舎が建った様子を見て、自分の気持ちが SVA の助けによって形になり、寄付をしたかいがあった、と感謝されるそうです。それを聞いて、SVA はカンボジア、日本といったお互い離れた国で、感謝の輪を広げ、感謝の連鎖を生みだしている、と感動しました。

また、東京事務所の活動は、カンボジアという遠い国ながらも、そこで暮らす人に思いを馳せ、直接にはなくても関わっていく機会を日本人に与え、お互いに関係を保つことで、平和な世の中を築くと同時に、幸せな気持ちを双方に生み出していると思います。

カンボジアでのインターンを終えた後、アメリカのカリフォルニア大学デイビス校にて1年間の短期留学のため、今はアメリカに滞在しています。こちらでは国際関係論について学び、それに関連したインターンシップを行う予定ですが、その際にも SVA での経験が役立つものと思っています。とかく今の情報社会ではどんな情報でも簡単に手に入り、経験が軽視されがちですが、このインターンシップではデータや本では決してわからないことを知ることができ、かつそれを自分の言葉で語れるようになったと感じています。また、実際のキャリアを考える上で道が以前よりも大きく開け、実際に様々な人に会い、話を聞くにつれて、将来必ずその人達と似た境遇に立たされている人のために働こうという確固たるモチベーションができました。また、上記で述べたような経験を通して、自分に足りないスキルがわかり、これから何を勉強していくべきかが以前よりもはっきりしたものになりました。

私と似たような夢を持っている人、これからインターンシップに申し込もうか迷っている人が、私の報告書を読んで SVA のインターンシップに申し込もう、という気持ちになってくれたら嬉しいです。

SVA でのインターンは、必ず自分にとってプラスの、かけがえのない経験になることを保証します。